

坪田讓治全集
5

新潮社

坪田譲治全集 第五卷

印刷 昭和五十二年十月十五日

発行 昭和五十二年十月二十日

著者 坪田譲治
つばた じょうじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京(〇三)二六六―五一一 業務部
二六六―五四二 編集部

振替番号 東京四―八〇八

印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社

定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えます。

坪田讓治全集 第5卷 目次

短篇小説（昭和27年～昭和32年）

ある老人の死

せみと蓮の花

三重吉断章

二十の春

母

遠い昔のこと

魔性のもの

女のこと

戸締り合戦

みみずくと蓮の花

木戸と垣根

雲煙四十年

八

五

四

四

四

七

七

六

二七

二八

二九

二九

虎彦竜彦

一七

*

あとがき

坪田譲治 三九

編集後記

三七五

(箱カット・中尾彰)

坪田讓治全集 第5卷（小説五）

せ
み
と
蓮
の
花
他

ある老人の死

死なない人間は一人もない。私も死ぬる。だから竹内健平が死んでも別にフシギはない。もう昔から解っていたことで、今、そのことを知って、感情を動かすのは、どうかしている。——こんなことも言えないことはないようなものの、然し、死というものは、考えても考えても、フシギなものである。生きるということに、千姿万態無限の味があるように、死ぬるということも深い感慨を呼び起す。

彼は私と同郷で、同じ中学の出身で、歳も同じであったように思われる。六十一か二である。すると、私の死ぬるのも、そう遠いことではないかも知れない。間もなく後を追う自分であれば、彼の死を悼むまでのことはないと云っても、そうは行かない。何しろ、彼は私の親友である。そ

れに一番尊敬した友達である。本誌から一文を求められた機会に、健平哀悼の辞をのべ、吾等五十年に及ぶ交友の思出を語って見たい。五十年と言えば一生の友であるが、実際に親しく語り合ったのは、中学四年五年の二年くらいのものであった。然しそんなことはよろしい。吾等は生涯無二の友達であった。

ややに移りきし夕日影の

のこる吾いのち今かきゆらん

みつかいよ翼をのべ

とこしえの故里へのせゆきてよ。

竹内のために、或は自分のために、このように讚美歌の一つもうたつて見たいような気がするのである。

竹内を知つたのは、いつ頃であったか。同じ中学だったのだから、十三から知っていた筈である。それが十六の四年生の時からしか覚えていない。その頃から急に親しさが増したのである。それというのも、その頃、吾々がいっとなくグループをつくつたせいと思われる。

私たちの中学校はもと岡山市にあった。岡山城の城跡の堀ばたにあった。ところが、その岡山城の本城天守閣の下には県立の岡山中学が立っていた。これは岡山第一の中学

である。私たちの中学は初め養忠学校と言って、中学まがいの学校であった。学年も四年しかなかった。四年を出ると、その県立岡山中学校へ入るのである。つまり県立の予備校まがいの学校であった。但し、県立中学の入学試験に落第した連中がみな入るのであった。私とても、十三歳の時、県立の入試に落第し、泣き泣き養忠学校へ入った。すると、二年になった時、突然この学校が金川という土地へ移ることになった。金川は、岡山から旭川をさかのぼること五里、中国鉄道津山線で一時間の距離にある。

岡山という都会から田舎の小さな町の学校へ通うのは、少しへんな話になるのであるが、仕方がなかった。転校出来る学校は、岡山に唯一の関西中学というのしかなかった。これはその頃大分の鎮西中学、広島島の明倫と言ったのとらび、硬派三中学として勇名をはせていた。弱気の私たちはその関西中学へ行く気にならず、百人以上の生徒がみんな汽車通学を始めた。寄宿舎も出来たし、下宿させる家もあって、それを利用する生徒もあった。然し私たちは汽車で通った。

汽車は珍らしくて、最初のうちは面白かった。それでも、学校が八時に始まるとすれば、岡山を七時発で、立たなければならなかった。その七時の汽車に乗るには、私のように駅近くに家のあるものでも、六時半に家を出なければなら

なかった。ところが、竹内は岡山駅から一里半もある旭川の河口に家があった。七時の汽車だと、六時前に家を出なければならなかった。大変なことであった。

それがまだその上の大変があったのだから、これは超大変と言わなければならない。即ち汽車は吾々の金川中学のための汽車ではなかったから、八時始業のために、七時岡山発なんていう都合は考えなかった。だから、それが六時半だったり、六時発だったりした。六時発となると、そこそ超大変列車である。竹内など五時以前に家を出る、私だつて五時半には家を出た。冬の朝、母が四時頃起きて、私のために温い御飯をたき、卵の入った汁をつくつてくれた愛情は、今も目に残っている。電燈をつけて母を前にしての一人だけの食事であつたが、その時の電燈の色と、湯気のたつ食事と、全く忘れ難いものである。

こんな時は駅へ行つてもまだ暗かった。だから竹内は暗い道を一里半来るわけで、途中には旭川の堤がつづき、そこには長いヤブがあつたり、堅固なカンゴクの塀などもつづいていた。冬はとにかく寒かつたらしい。それを彼は四年つづけた。私もつづけたと言っても私の方は、駅まで二十分である。彼の四分の一行程であつた。それでも卒業試験に落第しそうで心配になった時、やれやれ、もう一年またあの汽車に乗らなけりやならないかと思つたら、如何に

その汽車通学が辛いかが解った。

それはそれとして、このような通学を一緒にしたので、竹内とは級友という以上の親しさが出来たものと思われた。彼は第一、ジミで、おとなしい男である。素朴でもあった。そして怒ったことなど一回もなかった。その上に、彼は頭がよくて、勉強家であった。根気もいい。勉強にねばりもある。だから目立たなかつたけれども級中上位の成績を保っていた。私のように、頭が悪い上に根気がなく飽きっぽいものにとつてはそれこそ無くてならない友達であつた。行き帰りの車中の一時間彼と同車して教わらなければ、学業について行けないのである。その彼からいつでも教わっていた習慣のせい、今に私は夢を見る。中学の卒業試験、教室へ入つて、私は竹内をさがすのである。これはいつでも見る夢である。試験場で竹内に教わつたことはないのに夢ではいつでも試験場が出る。そして竹内が見つからないで私は絶望する。然しこのときまつてこう思う。

「おれは先に一度中学は卒業したはずだ。とすれば、今度は落第しても、前の中学卒業がとり消しになるってことはないだろう。」

竹内はこうして、私が六十二になつても、夢の中でさぐすほど親切な、頼りになる男であつた。然しまた彼は私と

共に危難を共にしたことがあつた。

四年生の時と覚えてゐるが、私たち四五人のグループが、学校の運動会とその準備の数日を休んだ。硬派のぎゅうじる運動会が心よからず思えたからである。ところが学校へ出て見ると、連中が私たちを制裁するというのである。時間中はその気配をどうにかして持ちこたえたが、時間が経つて帰る時になると、奴さん達テニスコートに集つた。私たちをのぞいた級の全部である。大幹部は来ないのであるが、中小の幹部は目の色を変えて、私たちを呼びに来た。

「オイ、坪田と竹内と、妹尾と鈴木と吉田はテニスコートへ来い。」

全く恐ろしい目をして言うのである。今日こそ、相当の目に逢わせてやるぞという、決心の色を見せている。彼等については、立派に大義名分が立つてゐる。存分になぐろうというわけである。ウデに自信のない私たち、中にも、小心で臆病で、こんな時一べんに震え上つてしまふ私。全くどうなることかと、顔色を変えた。先方は怒りに色を変え、私は恐怖に色を失つた。その時竹内を見ると、彼も恐ろしいのは恐ろしいのであろうが、ノーツとしている。大きな目をギョロリ、ギョロリとさせて、顔色はいつもの通り、赤いだけである。吾々は万策つくまで、教員室へ逃げこんだ。

「先生、辞書を見せて下さい。」

そんなことを言つて、教員室で、大英百科辞典か何かを悠々と見始めた。これには敵方も施すべがなく、窓の外に来て、

「オイッ、コラッいいかつ。」

などと、声をひそめて言うばかりであつた。そして間もなく時間が来て、先生方が何人かそろつて、駅へ急ぐのについて、私たちも駅へ急いだ。これで、その時の危難は免れたが、五年の時は一人一人遂に寄宿舎へ呼ばれてなぐられてしまった。これには竹内も少し興奮の色を見せていた。

この五年の時の被害は何が原因であつたかを忘れたけれども、気分の一つとしては次のようなこともあつた。即ち、卒業近くなつて将来の希望を届けろということになつた。

これは、上の学校はどこを志願し、就職は何を希望するかということであつたが、吾々はすねて、ヒネつた答を提出した。私は文士と書き、竹内は労働者と書いた。妹尾なんというのは、コスモポリタンと書いた。芸術家だの民主主義者だのというのもあつた。これらはやはり硬派のシャクにさわることであつたらしい。

然しこれからが竹内の本領であつた。彼は三月に中学を出ると、直ぐ渡米の手續きをとつた。四十何年も昔のこと

であるから、自由にアメリカに渡れた。そうしておいて、いよいよ出発するまで、親族の農家を手伝つた。田植などもやり、腰が痛いと言つていた。

その時、渡米組は同窓から三人出た。みんな名前にケンの字がついた。ケンベイ、ケンタロウ、ケンジロウ。そこで吾々の間で三ケンと言つた。三ケンはそろつて渡米した。神戸での宿は違つていたらしいが、船は同じであつた。ケンタロウか、ケンジロウの手紙をその頃貰つたことがあつたが、竹内は神戸で大分下級な宿屋にとまり、船中ではイリマメをかじつていたそうである。ケンタロウ、ケンジロウは、いやくも文明国アメリカに行こうという青年が——というのは大にハイカラだったのであるが、この竹内のやり方にヒンシュクした。困つたと、手紙に書いてあつた。

然しこのタロウ、ジロウの二人のケンは、成功しないで間もなくアメリカから引上げてしまつた。竹内だけ十年近くアメリカにいた。その為、中学で将来の志望に書いた通り労働をつづけた。まずアメリカにつくと直ぐ彼は線路工夫になつた。——今、僕はロッキイ山の山の中にいる。夜になると遠くアメリカライオンの吼える声が聞える。——

こんな手紙をよこしたのも、その頃のことである。こんな手紙は何通もあり、中々面白くて、私はその頃いた寄宿舎

で、同宿の友達に読んで聞かせた。そしてみんなに感心されたものである。

或時は彼はシャトルの方に出て来て、その辺で製材所に働いていた。流れ作業で、材木が上からドンドンころがって来る。それを規格通りに分けて行くのだとか云っていた。これは相当な熟練工でなければ出来なかった。それで報酬も相当になるというのである。これ迄で、彼の在米は何年になっていたか、私は今覚えていないけれども、このワシントン州に出て仕事をしている頃、彼は冬になると仕事を休んでホテル泊りをしていた。ホテルで読書するためである。一冬、ストーブの側で好みの本を読みふける楽しさは何ものにもかえ難いと、彼は手紙でも言い、日本に帰ってからも私に言い言いつた。その頃読んだ本は、トルストイの「戦争と平和」「アンナカレニナ」「復活」ドストエフスキイの「罪と罰」「カラマゾフ兄弟」「しいたげられし人」ニイチエの「ツァラトーストラ」マルクスの「資本論」クロボトキンの「相互扶助論」その他何百冊かである。というのは、実は帰国後私のところに本をあげたことがあって、三十年ばかり前私はそれらの本を手にとつて見たのである。凡て英語のもので、忠実に読んだらしく、書き入れなどがしてあった。中学でもよく出来た彼であったが、アメリカへ行つて、英語の勉強をしたものと思われる。私

など早大の英文科に学びながら、遠く竹内に及ばず、その時全く感心してしまった。

製材所から彼はカキの養殖場へ移った。これは冬の工作中々つらいしかなかった。然しきつといい金になったものと思われる。間もなく彼は帰つて来た。もう少しで三十か、三十幾つかになるという時であった。それは徴兵関係のためめらしかつた。一年ばかりこちらにいて、また渡米した。その時、貯金が一万円出来たと言つていた。今の百万円か、二百万円であろう。

再渡米からは直ぐ帰つて来た。一年であつたか、二年であつたか忘れたが、また一万円稼いで来たのである。これら二万円で、彼は間もなく、北海道北見の奥に土地を買つた。山林二十町歩と、畑二十町歩である。その前に美しいお嫁さんを貰つて、その北見へ移つて行つた。彼はそこで実に勤勉に働いた。インテリで農業を始めたものに、今迄成功したものはなかった。然し彼の場合はインテリの百姓でなくて百姓のインテリであつた。だからそれら四十町歩の土地を経営して少しも失敗しなかった。昔、私もそういう生活がしたくて、学校を中退したことさえあり、彼の生活をうらやましく思つたり、また大に感心したりした。

私とその北見の山奥に彼を訪ねたのは十年前と七年前とであつた。彼の山林の奥から水銀がとれるとかで彼の森の

中を輕便鐵道が通っていた。私はその鐵道を歩いて谷川の岸に立つている彼の家を訪ねて行つたが、その家を取りまく森はいずれも二抱えも三抱えもある大木ばかりで彼が自慢のものであった。

彼の家には六月というのにストーブが燃えていた。前の谷川の水が氷のように冷いせい、ストーブも邪魔にならなかつた。都合でちよつとしかいになかつたが、帰りに彼の畑の方を歩いた。二十町と言へば全く相當な広さであつた。私はその頃元気だつたけれどもこれは走つては廻りかねる広さだと思つたりした。彼は家に馬を飼つていて、すべて馬耕である話をしていた。

ところで、約束の枚数が来たので終を急がなければならぬが、終戦前後のあの食糧不足の時に於て、彼と彼の夫人がどんなに私に親切であつたかを書き落してはならない。昭和十九年に私が訪問した時、彼は大ビンに一つ、私にアメをくれた。ジャガ芋と交換で手に入るのだということであつた。あの頃、これがどんなに貴重なものであつたか、言うまでもないことである。それから次々と、私が頼みもしないのに、彼は小包で私のところへ豆類を送つて来た。大豆小豆、白豆、黑豆、ウズラ豆なんていうのもあつた。モチになるアワを送つて来たこともあつた。尤もハラの足しになるほどは、郵便局が許さなかつた。然し私ばかりで

はない。妹尾という中学の同じグループにも、私同様彼は小包を送つた。あの頃、頼まなくても食料の小包を送るなんていうものは、まず吾国広しといへども珍らしかつた。

私は變に感銘した。ところが、そればかりではない。いよいよ終戦近く、吾国が地響きを立てて動揺し始めていた二十年の春、彼は私に言つてよこした。

「北海道へ来る気はないか。畑を五段ほど貸して、馬耕はしてやる。そこでジャガ芋をつくれ。君と奥さんの食料にはこと欠くまい。」

これには全く私は頭を垂れた。これだけのことを言うものは、あの頃、親子の間でもなくらいの時である。

この竹内健平が自殺したと言つたら、読者はビックリされるであろう。私も簡単な死亡通知を受けておどろき、夫人のところへまるで詰問書のような手紙を書いた。——何故竹内は死にましたか。あの健康で、温順で、素朴で、昔から病氣一つしなかつた竹内が、何故、こう突然死んだのでしょうか。——すると夫人から、竹内は恥しいことは何一つ致して居りませんけれども、昔から變つたところのある人で、自ら死を選んだので御座います。——と手紙が来た。

私は今もなお彼の死がナツトク出来ない。然し家のものに言つと、恐らくそれはそんな山奥で心を打ち明けて語る

友達がなく、次第にユウウツになって死んだのではないかと、言うのである。そうとすれば、やはりインテリの死で、彼も心の奥までは百姓に、労働者になり切れなかったと思われる。とは言うものの、六十二で、二人の娘さんに三人の孫のある身で、少しも生活に困らず、古今東西の本を読書する力をもちながら、ナゼ、死を急がなければならなかったか。氣持も昔から民主主義で、時勢に合わないなんていうことの決してない彼であつたのに。そして、人生の幾山河を越え來たつて、若い頃空想した境遇に達した今、ナゼ彼は死を急ぐのであるか。考えても、私はナットク出来ない。だが若い人達に一言申上げれば、老年というものは淋しいものである。この淋しさ、この味気なさ、これが或は彼をして死に誘つたのかも知れない。私はここに頭を傾けて、そんなことを思ふのである。